

# アグニの神

芥川龍之介

青空文庫



支那の上海シヤンハイの或町です。昼でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亜米利加人アメリカと何か頻しきりに話し合つてゐました。

「実は今度もお婆さんに、占うらなひを頼みに来たのだがね、——」  
亜米利加人はさう言ひながら、新しい煙草たばこへ火をつけました。

「占うらなひですか？ 占うらなひは当分見ないことにしましたよ。」  
婆さんは嘲あざけるやうに、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見上げてても、御礼さへ碌ろくにしない人が、多くな

つて来ましたからね。」

「そりや勿論御礼をするよ。」

亜米利加人は惜しげもなく、三百弗ドルの小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差当りこれだけ取つて置きさ。もしお婆さんの占ひが当れば、その時は別に御礼をするから、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想あいそがよくなりました。「こんなに沢山頂いては、反かへつて御氣の毒ですね。——さうして一体又あなたは、何を占つてくれるとおつしやるんです?」

「私が見て貰ひたいのは、——」

亜米利加人は煙草を啣くはへたなり、狡かうくわつ猾わつさうな微笑を浮べま

した。

「一体日米戦争はいつあるかといふことなんだ。それさへちやんとわかつてゐれば、我々商人は忽ちたちまの内に、大金儲けが出来るからね。」

「ぢや明日あしたいらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから。」

「さうか。ぢや間違ひのないやうに、——」

印度人の婆さんは、得意さうに胸を反そらせました。

「私の占ひは五十年来、一度も外はっれたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね。」

亜米利加人が帰つてしまふと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「恵蓮<sup>ゑれん</sup>。恵蓮。」と呼び立てました。

その声に応じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頬は、まるで蠟<sup>ろうふ</sup>のやうな色をしてゐました。

「何を愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ぐ</sup>愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ぐ</sup>してゐるんだえ？　ほんたうにお前位、づうづうしい女はありやしないよ。きつと又台所で居眠りか何かしてゐたんだらう？」

恵蓮はいくら叱られても、ぢつと俯<sup>うつむ</sup>向いた儘<sup>まま</sup>黙つてゐました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺ひを立てるんだからね、そのつもりでゐるんだよ。」

女の子はまつ黒な婆さんの顔へ、悲しさうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？ 忘れちやいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すやうに指を挙げました。

「又お前がこの間のやうに、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺さうと思へば、雛ひよつ仔この頸くびを絞めるより——」

かう言ひかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、恵蓮はいつか窓側まじぎはに行つて、丁度明いてゐた硝子窓ガラスまどから、寂しい往来を眺めてゐるのです。

「何を見てゐるんだえ？」

恵蓮は愈いよいよ色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、さう私を莫迦ぼかにするんなら、まだお前は痛い目に会ひ足りないんだらう。」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒ほうきをふり上げました。丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

## 二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があります。それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆気あつけ



にとられたやうに、ぼんやり立ちすくんでしまひました。

そこへ又通りかかつたのは、年をとつた支那人の人力車夫です。「おい。おい。あの二階に誰が住んでゐるか、お前は知つてゐないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりかう問ひかけました。支那人は楫かぢ棒ぼうを握つた儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？ あすこには、何とかいふ印度人の婆さんが住んでゐます。」と、気味悪さうに返事をするそうそうと、々行きさうにするので

「まあ、待つてくれ。さうしてその婆さんは、何を商売にしてゐるんだ？」

「うらなしや占ひ者です。が、この近所のうはさ噂ぢや、何でも魔法さへ使ふさうです。まあ、命が大事だつたら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いやうですよ。」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考へてゐるやうでしたが、やがて決心でもついたので、さつさとその家の中へはひつて行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんのののし罵る声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。日本人はその声を聞くが早いか、ひとまた一ひとまた股に二三段づつ、薄暗い梯子を馳け上りました。さうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはひつて見ると、そ

ここには印度人の婆さんがたつた一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見当りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑はしきうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占ひ者だらう？」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨にらみ返しました。

「さうです。」

「ぢや私の用なぞは、聞かなくてもわかつてゐるぢやないか？  
私も一つお前さんの占ひを見て貰ひにやつて来たんだ。」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益ます疑ますはしきうに、日本人の容よう子すを窺うかがつてゐました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方<sup>ゆくへ</sup>知れずになつた。それを一つ見て貰ひたいんだが、——」

日本人は一句一句、力を入れて言ふのです。

「私の主人は香港<sup>ホンコン</sup>の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子<sup>たへこ</sup>さんとおつしやる。私は遠藤といふ書生だが——どうだね？ その御嬢さんはどこにいらつしやる。」

遠藤はかう言ひながら、上衣の隠しに手を入れると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所ぢや、御嬢さんを攫<sup>さら</sup>つたのは印度人らしいといふことだつたが、——隠し立てをすると為にならんぞ。」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる気色が見えませぬ。見えない所か唇には、反つて人を莫迦ばかにしたやうな微笑さへ浮べてゐるのです。

「お前さんは何を言ふんだえ？　私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありやしなないよ。」

「嘘をつけ。今その窓から外を見てゐたのは、確に御嬢さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握つた儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにゐる支那人をつれて来い。」

「あれは私の貰ひ子だよ。」

婆さんはやはり嘲るやうに、にやにや独り笑つてゐるのです。

「貰ひ子か貰ひ子でないか、一目見りやわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこまうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはひられてたまるものか。」

「退け。退かないと射殺すぞ。」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。

が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くやうな声を立てたかと思ふ

と、まるで電気に打たれたやうに、ピストルは手から落ちてしまひました。これには勇み立つた遠藤も、さすがに胆きもをひしがれたのでせう、ちよいとの間は不思議さうに、あたりを見廻してゐましたが、たちま忽ち又勇氣をとり直すと、

「魔法使め。」と罵りながら、虎のやうに婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身をかは躲すが早いか、そこにあつた箒をとつて、又掴みかからうとする遠藤の顔へ、床の上の五味ごみを掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といはず、口といはず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はどうとうたまり兼ねて、火花のつむじかぜ旋風せんぷうに追はれながら、

転<sup>ころ</sup>げるやうに外へ逃げ出しました。

## 三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は独り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火<sup>ほ</sup>影<sup>かげ</sup>を口<sup>く</sup>惜<sup>や</sup>しさうに見つめてゐました。

「折角御嬢さんの在<sup>あ</sup>りかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴へようか？ いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香<sup>ホ</sup>港<sup>ン</sup>でもう懲<sup>こ</sup>り懲<sup>ご</sup>りしてゐる。万一今度も逃げられたら、又探するのが一苦労だ。といつてあの魔法使



には、ピストルさへ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考へてゐると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて来た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、——もしや御嬢さんの手紙ぢやないか？」

かう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾ひ上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん円な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違ひない、消えさうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家<sup>ウチ</sup>ノ才婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜

中ニ私ノ体へ、『アグニ』トイフ印度<sup>インド</sup>ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ツテキル間中、死ンダヤウニナツテキルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知りマセンガ、何デモ才婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借りテ、イロイロ予言ヲスルノダサウデス。今夜モ十二時ニハ才婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乗リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツテシマフノデスガ、今夜ハサウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ真似ヲシマス。サウシテ私ヲ才父様ノ所へ返サナイト『アグニ』ノ神ガ才婆サンノ命ヲトルト言ツテヤリマス。才婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖<sup>コハ</sup>イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダラウト思ヒマス。ドウカ明日<sup>アシタ</sup>ノ朝モウ一度、才婆サンノ所へ来

テ下サイ。コノ計略ノ外ニハ才婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハ  
アリマセン。サヤウナラ。」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は  
十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さ  
んはまだ子供だから、余程運が好くないと、——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでせう。今ま  
で明るかつた二階の窓は、急にまつ暗になつてしまひました。と  
同時に不思議な香かうにほひの匂が、町の敷石にも滲しみる程、どこからか静  
に漂つて来ました。

## 四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を拵げながら、頻しきりに呪文じゆもんを唱へてゐました。書物は香炉かうろの火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせてゐるのです。

婆さんの前には心配さうな恵蓮ゑれんが、——いや、支那服を着せられた妙子たへこが、ぢつと椅子に坐つてゐました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはひつたであらうか？ あの時往來にゐた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違ひでは

なかつたであらうか？——さう思ふと妙子は、ゐても立つてもゐられないやうな気がして来ます。しかし今うっかりそんな気<sup>け</sup>ぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使ひの家から、逃げ出さうといふ計略は、すぐに見破られてしまふでせう。ですから妙子は一生懸命に、震へる両手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乗り移つたやうに、見せかける時の近づくの<sup>を</sup>今か今かと待つてゐました。

婆さんは呪文を唱へてしまふと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立つた儘、両手を左右に挙げて見たり、又或時は後へ来て、まるで眼かくしでもするやうに、そつと妙子の額<sup>ひたひ</sup>の上へ手をかざしたりするのです。も

しこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子ようすを見てゐたとすれば、それはきつと大きな蝙蝠かうもりか何かが、蒼白い香炉の火の光の中に、飛びまはつてでもゐるやうに見えたでせう。

その内に妙子はいつものやうに、だんだん睡氣ねむけがきざして来ました。が、ここで睡つてしまつては、折角の計略にかけることも、出来なくなつてしまふ道理です。さうしてこれが出来なければ、勿論二度とお父さんの所へも、帰れなくなるのに違ひありません。「日本の神々様、どうか私が睡らないやうに、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとひ一目でもお父さんの御顔を見ることが出来たなら、すぐに死んでもよろしうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺だませるやうに、御力を御貸し下

さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおひおひと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼どらでも鳴らすやうな、得体えたいの知れない音楽の音が、かすかに伝はり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える声なのです。

もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出来ません。現に目の前の香炉の火や、印度人の婆さんの姿でさへ、気味の悪い夢が薄れるやうに、見る見る消え失せてしまふのです。「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使ひが、床ゆかの上にひれ伏した儘、噎しほがれた声を挙げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寝入つてゐました。

## 五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使ふ所は、誰の眼にも触れないと、思つてゐたのに違ひありません。しかし實際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗のぞいてゐる男があつたのです。それは一体誰でせうか？——言ふまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往わうらい来に立つたなり、夜



明けを待たうかとも思ひました。が、お嬢さんの身の上を思ふと、どうしてもちつとしてはゐられません。そこでどうとう盗人のやうに、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透すき見みをしてゐたのです。

しかし透き見をすると言つても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香炉かうろの火の光を浴びた、死人のやうな妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははひりません。しかししはが唖れた婆さんの声は、手にとるやうにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

婆さんがかう言つたと思ふと、息もしないやうに坐つてゐた妙子は、やはり眼をつぶつた儘、突然口を利き始めました。しかもその声がどうしても、妙子のやうな少女とは思はれない、荒々しい男の声なのです。

「いや、おれはお前の願ひなどは聞かない。お前はおれの言ひつげに背そむいて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に悪事の罰くだを下してやらうと思つてゐる。」

婆さんは呆あつ氣にとられたのでせう。暫しばくは何とも答へずに、喘あへぐやうな声ばかり立ててゐました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し続けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかつたら、明日とも言はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」

遠藤は鍵穴に眼を当てた儘、婆さんの答を待つてゐました。すると婆さんは驚きでもするかと思ひの外、憎々しい笑ひ声を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦ばかにするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に欺だまされる程、耄碌まうろくはしてゐない心算つもりだよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人ぢやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか

。」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿もつたい体なくもアグニの神の、声こ色わいろを使つてゐるのだらう。」

さつきから容子ようすを窺うかがつてゐても、妙子が實際睡つてゐることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略ろけんが露顕ろけんしたかと思はず胸を躍うらせました。が、妙子は相変まへらず目蓋まぶた一つ動かさず、嘲笑あざわらふやうに答へるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。」

おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言ひつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらつたやうです。が、たちま忽ち勇氣をとり直すと、片手にナイフを振りながら、片手に妙子の頭髪を掴んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔あまめ。まだ剛情を張る気だな。よし、よし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟とつさに身を起すと、錠のかかつた入口の戸を無理無体に明けようとしてました。が、戸は容易に破れません。いくら押ししても、叩いても、手の皮が摺すり剥むけるばかりで

す。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ声が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたやうです。遠藤は殆ど気違ひのやうに、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香炉に蒼白い火がめらめら燃えてゐるばかり、人気のないやうにしんとしてゐます。

遠藤はその光を便りに、怯おづ怯おづあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはひつたのは、やはりぢつと椅子にかけた、死人のやうな妙子です。それが何故なぜか遠藤には、頭に毫ごく光わうでもかかつてゐるやうに、嚴かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん。」

遠藤は椅子の側へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶつたなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやつと夢がさめたやうに、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「さうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げませう。」

妙子はまだ夢ゆめうつつ現うつのやうに、弱々しい声を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠つてしまつたものだから、——  
—かんにん堪忍して頂戴よ。」

「計略が露顕ろけんしたのは、あなたのせみぢやありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑かかつた真似をやり了おほせたぢやありませんか？——そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしさうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠つてしまつたのですもの。どんなことを言つ



たか、知りはしないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭もたれながら、眩つぶやくやうにかう言ひました。

「計略は駄目だつたわ。とても私は逃げられなくてよ。」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大変です。」

「だつてお婆さんがゐるでせう？」

「お婆さん。」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさつき  
の通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰向あふむきに倒れて  
ゐるのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸  
へ、自分のナイフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐまし

た。

「お婆さんはどうして？」

「死んでゐます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかつたわ。お婆さんは遠藤さんが——あなたに殺してしまつたの？」

遠藤は婆さんの屍骸しかいから、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、——しかしその為に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やつと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だつたのです。

「私が殺したのぢやありません。あの婆さんを殺したのは今夜こ

こへ来たアグニの神です。」

遠藤は妙子を抱<sup>かか</sup>へた儘、おごそかにかう囁<sup>ささや</sup>きました。

(大正九年十二月)



# 青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月11日公開

2004年2月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# アグニの神

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>